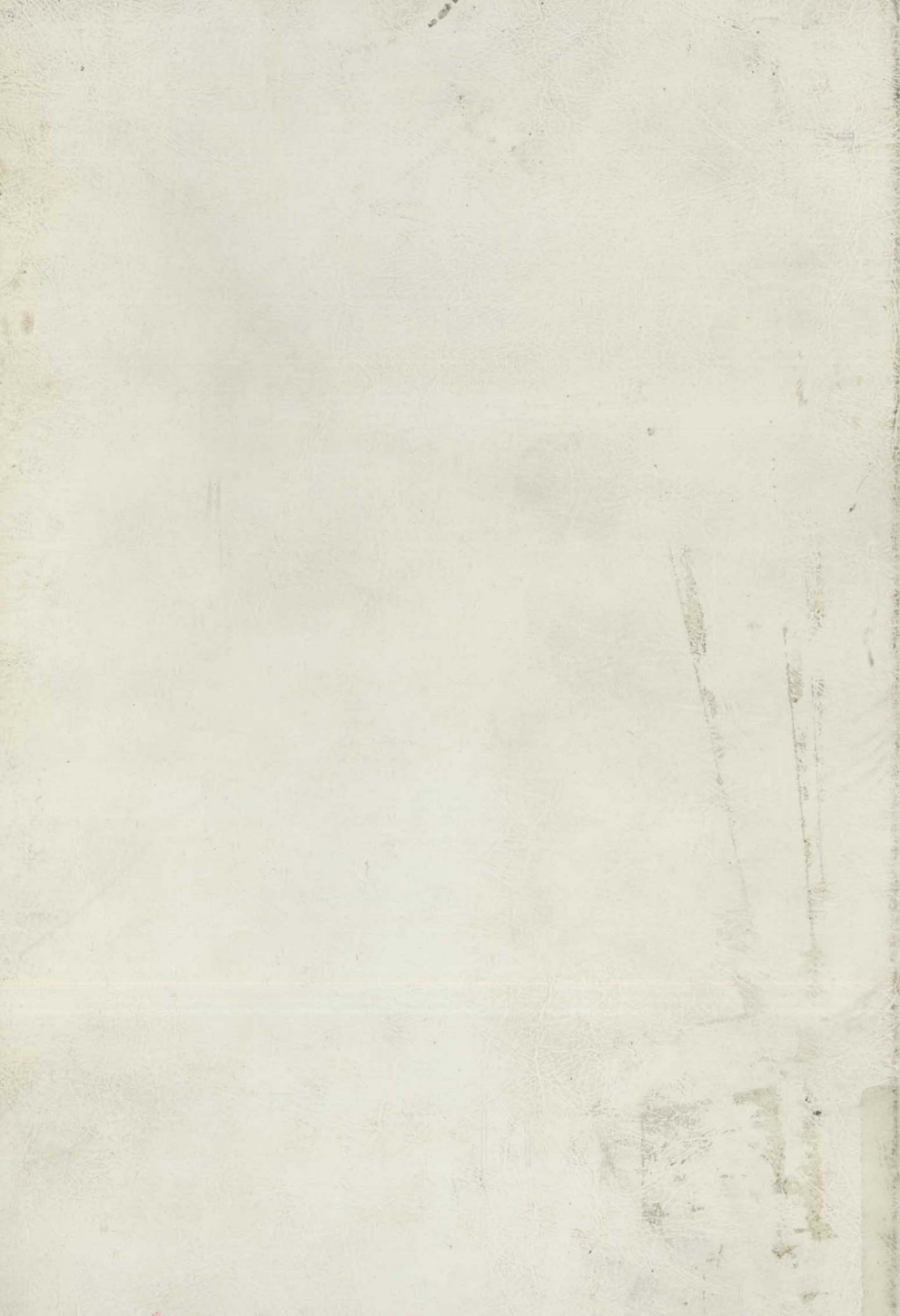




大佛次郎自選集 現代小説 第7卷

朝日新聞社

船

大佛次郎自選集 現代小説

第七卷 風 船

全十卷・第三回配本

1100円

昭和四十七年十二月十日発行

著 者 大佛次郎

装幀者 原 弘

発行者 角田秀雄

印刷所 明善印刷

製本所 松岳社

製函所 加藤製函

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

0393-240137-0042

大佛次郎自選集

現代小説

第七卷

第七卷目次

風
船

風

船

暖かい夜

変な晩であった。時候はずれの陽気と客との間に関係があるのか？ 冬の晩の七時に成って、ひとりの客も酒場ミノトオルの戸口を押して姿を見せなかった。

クリスマスも近く、暮れ方の外の人通りは、見たところ相当だったのである。

「ブリッジをしましょう。」

主の浦子は、トランプを持ち出して、彫刻のように動かない顔立のまま、隅のテーブルすみに向って腰かけた。

たれか腕を伸ばして近くのスタンドランプのスイッチをひねったので、浦子を中心に集まった私たちの髪や首筋に一度に光が降りそそがれて、思い思いのドレスの色が急に鮮やかに見えた。

「だれとだれ？」

ブリッジの遊び方をマダムに教わった者ばかりであった。

久美子だけが、離れた椅子いすで文庫本を出して読もうとしていた。

「久美子さん、どう？」

「やめて置きますわ、マダム。だれか、ほかのひと……」

「あたしも、見る番に回る。」

と、そばから申出た者があつた。

客が来れば、やめることに成る勝負だったが、いつも来る客の中には、自分から代って加わるような者もあつた。壁に掲げてある油画の額や、古めかしい鏡までが、この店の性格を物語っていた。

「この画は、本物かい？」

とまだ物慣れない客は尋ねる。

マダムは、静かな笑顔^{えがお}で、

「そのつもりなんです。」

戦後、生活の道を見失つた上層階級から、やたらに酒場や喫茶店を出して、みんな失敗して代変りに成つた中で、このミノトルだけが七年も続いて来たのは、旧華族でも戦後も富裕で知られているパトロンがマダムの後に付いていて、つながりのある良い客がクラブの会員のように集まっているからである。

「暑過ぎない？」

と、マダムがつぶやいた。

「ヒーターを落したら？」

「いいえ、今夜は、外が、いやに暖かいの。」

「あの、ひどい風のあとで、急に暖かくなつたんですね。温暖前線って言うの？ それに、濃い霧……遠くが、まるで見えなかったわ。」

トランプを切る音を聞きながら、久美子は立って戸口に出て見て、ガラスが浴室の窓のように曇っているのを見た。ドアをあけると、皮膚に心地よく冷たいはずの冬の夜の外気が、屋内よりも暖かいくらいであった。

目の前一面に濃いガスが降りて、あたりを真珠色に煙らせている。燈火は滲^{にじ}んで、まるい小さい虹の輪にかこまれている。

「きれい！」

と、派手に声を上げたが、たれも店の中からは答えなかった。

ドアを背中にしめて、久美子は、霧の中に進み出た。

店は、路地の奥に在る。表通りを十メートルほど先に見るのだが、自動車のヘッドライトが遠くから動く中に、歩いているひとは異形^{いぎよう}の物体が動いているように見え、靴音と話声^{ともな}が伴っている。人間の影法師が立って、重なり合って歩いているようであった。

町角まで出て見ようとしてから、久美子は急に足を留めた。ブリッジのテーブルに残して来た仲間の中で、たれかが、

「村上さんが来ないか見に行ったのよ。」

と、自分のことを陰で言い出しそうで気がおくれたのであった。

それだけ自分に弱味が出来ている、と思った。

マダムが育ちも良い、経歴もきれいなひとだったので、店で働く者も不幸な戦争で急に境遇が変った女たちばかりだったが、品よくしているだけに、意地悪い性質が隠れていた。女たちは、心持も生活もおごった過去を持っていた。その時分の自尊心が、今でも、他人のあらを見つけやすくしていた。

挑むような心持を久美子は感じて来た。確かに強く成っていた。何を言われてもはねつけるだけの、幸福な気持が、若い軀をすぐに一杯にして、肩や腕から外に、あふれ出ようとするのだった。朝、鏡を見る時も、自分が美しく成ったと見るくらいである。

「何か、あなた、近ごろ、楽しそうね。」

と、いつだったか言われた時も、相手の目を見て、すぐに返事が出来たのであった。

「そうよ。」

そして、路地の入口まで出て、通るひとを見てみると、やはり自分が、そのひとを待っているのだと、はっきりして来るのが幸福であった。

舗装した路面が濡れて黒いのも、ガスに湿気のあるせいらしかった。自動車のタイヤが、地に吸いつくような音を立てて通って行った。

たれかが久美子とすれ違って、路地をはいつて行った。花を売りに来る娘かと思ったが、外套を着ていたし別人であった。髪につけているらしい口オシヨンの匂いが残った。

それが霧の中に消えると、影のように目の前を歩いている人の中に、やはり久美子は村上を待っていた。

ミノトオルの戸口からたれか、こぼれ出て来て、久美子の名を呼んだ。

「なに？」

「お客さま。」

「あたしに？」

「暖かいのね。まるで、温泉にでもはいつているよう。」

それから、彼女は所帯臭く言った。

「地震でもないといいのね。」

店の中へはいると、ブリッジの遊びは、ランプの下で、まだ続いていた。けれど、お客、と言って、男ではなく、今、路地の入口ですれ違った若い娘が、膝頭ひざがしらをそろえて客の長椅子に居るだけであつた。酒場には不向きな感じであつた。

久美子を迎えた目が笑っている。きれいな光り方をしているし、処女であつた。

「いらっしゃいます。」

と、頭をさげてから、久美子は、てれて、ブリッジの仲間を振向いた。

「どうしたの？」

マダムが、彫刻のように無表情なのは、女に対する時だけであつた。男の客には、別の顔を、もう一つ持っている。

「御註文は？」

「あかし、ビール、好き。」

と、娘が急に答えた。

久美子は、立つて行つて、習慣どおり支度して来た。つつましい娘に見えても二十には成つてゐるだろう。それに戦後なのだ。不思議とも思わない。

「変な晩ですわね。あたたかくて。」

久美子は、目を上げて近くから観察した。ロオシヨンの匂いが、さっきのものである。可愛らしいが、まだ美しいとは言えない。もっと光の明るいところで見たら、水蜜桃のように生ぶ毛が膚に光っているのかも知れない。顔の輪郭も、まだ決つた形を取つてなかつた。自分ひとりで、内証の楽しいことがあるように、笑いを押えている。

中学生のいたずらっ子に、よくある表情。

「ビール、好きなんですか？」

「ええ。」

と、また笑いたく成つたのを逃がしたようで、

「つめたくて、おいしいわ。」

「こういうところへ、時々、いらっしゃるの？」

悪い質問だった。少女は、笑いかけて苦しそうにハンケチを出して口を押えながら、首だけ横に振って見せた。

「初めて。」

それから、急に真顔で、くるむような目を久美子に向けた。

「ミノトオルってお店の名前、ギリシャ神話に出る、からだが人間で、頭が牛の形をしているお化けなのね。あたし、綴りを考えて、字引をひいて見たの。」

「そうですって。」

おかしい名前、と答えたつもりであつた。

「私、ここへ来て教わったんですわ。」

娘は、いたずらそうな顔付を見せた。

「もっと、別の意味もあるのね。」

「……………」

「辞書にあつたわ。ミノトオルって、『だまされた夫』ってことですって。」

久美子は、それを知らなかったし、自分より年下の娘から、そんなことを言われたので、ひそかな注意を向けた。

「存じませんわ。」

「でも、辞書には、そう書いてあるの。それを分つて、お店の名、ミノトオルなんて、つけたんでしようか？」

久美子は、太刀^{たち}討出来ぬ相手を、娘に感じた。黙^{だま}って、ビールをつぐ動作に変わった。

「ここのお店のは、牛の首をした怪物の方なんでしょう。」

娘は答えないで、ビールを口に持つて行つた。その唇は、口紅もつけてなかった。

「あたし、画を勉強しているの。」

「まあ、画家。」

はにかんで見えた。

「そう。いつか出来たらね。」

微笑は、すべて、柔かく不透明な膚の奥、深いところに隠れた泉があつて、間遠^{まどお}にわき出て、波紋をひらいているようであつた。かなり長く黙^{だま}っていてから、

「あたしを、だれか、おわかりにならない？」

久美子は顔を見つめて、目鼻立の特徴よりも、無邪気な心持を読んだ。

「さあ。」

「似てないって、言うわ。」

「どなたに？」

久美子は、考え込んだ様子で眉をひそめた。